

タイトル	縹渺たる存在被拘束性
著者	水野, 邦彦; MIZUNO, Kunihiko
引用	季刊北海学園大学経済論集, 66(4): 81-87
発行日	2019-03-31

## 《論説》

## 縹渺たる存在被拘束性

水 野 邦 彦

*Prof. Kosaka Naoto in aufrichtiger Dankbarkeit*

マンハイム・カーロイ（カール・マンハイム）といえは存在被拘束性概念が連想され、存在被拘束性といえはマンハイムの名が思い起こされるであろう。けれどもマンハイムの存在被拘束性概念がかならずしも明瞭でなく曖昧な点が多いことはつとに指摘されており、たとえばマートンはつぎのように批評する<sup>1)</sup>。

「〈知識の存在被拘束性〉にかかるマンハイムの中心命題の心臓部におけるぼんやりしたものの *vagueness*, ぼやけたもの *obscurity*」がみとめられる。それは主として「マンハイムが社会構造と知識との関係の類型 *type* や様式 *mode* を具体的に述べなかつたために……その分析が限られたものになった」と考えられる。マンハイムは「区別が不十分で形が定まらない知の範疇」, 「統合整備されていない種々の仮定 *unintegrated assumptions*」をみずからの理論上の概念として用いているゆえ、その理論は「概念枠組において根本的に不安定」なもの、さらには「折衷」的なものにならざるをえず、叙述の随所に「根本的な優柔不断 *indecision*」を散りばめることになった。こうして「類型を異にする諸探究をひとつの見出しのもとに組みこむ把握は、存在被拘束性にふくまれている機構をあきらかにするというより、むしろそれを曖昧にする

*confuse* ものでしかない」という結果に終わってしまったというのである。

知識社会学のみならず社会思想のひとつの重要概念をなす存在被拘束性のいかなる側面に欠損があったのか、そもそもマンハイムは存在被拘束性概念によってなにを論じようとしたのかについて、執筆時期の異なるマンハイムの論攷を俎上にのぼしつつ、若干の粗描をこころみたい。

## I. 「知識社会学問題」1925年

知識社会学をはじめて表題に掲げたこの論攷では思考と存在とが部分と全体との関係としてとらえられ、前者の思考や理論や観念や〈世界観の体系〉は、後者の包括的な存在もしくは各構成体を支え合う体系的全体性の表現であり函数（機能, *Funktion*）であると位置づけられる。体系的全体性は〈*Konstellation*〉（布置, 布置状況）ともよばれるが、自立的な最終的存在にほかならず、ヘーゲルのいう精神的なもの、マルクスのいう社会的・経済的なものにはほぼ相当する。逆に思考や思想は、それだけで自立し完結するものではなく、社会的存在の函数であり流出物であるとみなされる<sup>2)</sup>。

<sup>1)</sup> Robert T. Merton, *Social Theory and Social Structure*, New York, 1957, pp.491, 497, 498, 499.

<sup>2)</sup> Karl Mannheim, *Das Problem einer Soziologie der Wissens*, H.Maus und F.Fürstenberg, hrsg.,

ここで重きが置かれるのは、思考や観念が自立的でないこと、それらが社会的存在のうえに成り立つことである。社会的存在は〈Konstellation〉とよばれる形態を有し、〈Konstellation〉内に布置されている各要素の相互作用による融合ないし結合である。いまだ存在被拘束性という言葉は用いられないものの、実質的には、人々の思考や観念が〈Konstellation〉によって知らず知らずのうちに方向づけられ制約されるという存在被拘束性のありかたが叙述されている。マンハイムは、一定の思考様式、ひとつの思考の立場が、ある世界観の体系に根を下ろしていること、その世界観の体系が一定の経済体制・支配体制に帰属することを示す<sup>3)</sup>。

ここであきらかにされるのは、思考が存在によって方向づけられ、存在の制約を受けることであり、この思考の存在被拘束性を事実として明確に認識することにマンハイムの主眼が置かれていたといえる。この側面だけを見るとマンハイムの立場は「物質が意識を規定する」という唯物論や「実存は本質に先立つ」という実存主義に近く、観念や精神こそが世界をつくっているという観念論に対立するようにみえるが、この点はのちに再度とりあげる。

思考や観念は存在に制約された非自立的なものともみなされ、存在の函数であるにとらえられる。けれども同時にマンハイムは、思考や観念が全体的社会的存在に解消されうるものでなく、人間にとって思考や観念は独自の存在意義を有すると考える。じつはマンハイムにとってこのことは知識社会学の前提であり、そのうえで思考や観念がなんらかの特定の社会的存在を拠点としていることが論じら

れるのである。

このような構図を描きつつマンハイムは、〈Konstellation〉の態をなす社会的存在にではなく、あくまでも思考に関心を注ぐ。このことは、思考が依拠せざるをえない自立的な最終的存在にたどりついても、マンハイムがそれをもって事足りたりしたり、最終的存在にとらわれている思考や観念を抛棄したりせず、依然として形而上学を尊重する姿勢をくずさないところから窺える。思考は全体性の函数であるという場合にも、力点が置かれるのは全体性でなく思考である。このような関心を念頭に置きつつ、概念構成として、思考が全体的存在に拘束されているという存立構造の基礎づけをはかったのが、1925年の「知識社会学問題」論攷であるといえる。

マンハイムの意図にそって全体的存在の函数である思考や観念を把握するには理解と解釈とが必要になるが、それは自然科学者や心理学者のよくなしうところではない。思考や観念のような精神的世界を把握するには形而上学が前提されざるをえず、そのため形而上学は世界観の克服されえない成分とみなされる。

あわせて「実在するもの die Wesenheiten は動的 dynamisch ですらある」といわれるとおり、マンハイムにとって精神的世界や実在は、普遍的なものでも静的なものでもなく、動的なものであることに留意しなければならない。思考は動的-精神的な全体性のひとつの「部分」として、全体的な存在に連なるものであり、存在に拘束されるものである。この点をわきまえない観念論は、輪郭を缺いたものとならざるをえない<sup>4)</sup>。

ここで留意すべきは、拠点となる社会的存在がけっして固定的でも普遍的でもなく、歴史や現実のなかで生成する動的なものと考え

*Wissenssoziologie*, Soziologische Texte, Bd. 28, Berlin, 1964, SS.308, 313, 317, 319, 320.

<sup>3)</sup> Mannheim, Das Problem einer Soziologie der Wissens, SS.379.

<sup>4)</sup> Mannheim, Das Problem einer Soziologie der Wissens, SS.330, 361, 363-364, 366.

られていることである。「知識社会学の関心は生成 Werden に、それももっぱらときどきの時代にみられる、思考するさいの立場の存在被拘束的な生成に、集中する」<sup>5)</sup> という叙述はこのことを示すであろう。

## II. 『イデオロギーとユートピア』 1929年

マンハイムのいう存在被拘束性は主として人々が普遍的全体的イデオロギーに拘束されているさまを表現する概念である。この全体的イデオロギーのもとに「ひとつの時代や歴史的・社会的な意味で具体的な集団が有する全体的な意識構造の特徴と性質」が想定される。なんらかの見解や視点、さらには思考の体系は、「主体の存在位置」もしくは本人が「社会的に置かれた状況」の函数として受けとめられる<sup>6)</sup>。

思考や観念が全体的存在に拘束されているという「知識社会学問題」に呈示されていた理論枠組は『イデオロギーとユートピア』において「おのおのの生きた思考の〈存在被拘束性〉のもつ普遍的正当性」として前提され、そのうえで「人間の思考 Denken は……つねに、社会的な意味で自由な空間のなかのある地点に根を下ろしている」こと、「ある体験、ある行動、ある考えかた Denkweisen など、決まった地点と決まった時点とでのみ可能である」ことが論じられる。それは思考を、世界の立脚点たる場を再構成するような「過程の全体性から理解する」ことである<sup>7)</sup>。

このように思考や考えかたは、そのときどきに人々が社会的に置かれた状況、存在位置

に根を下ろしており、そこにあつてこそ成り立つとされる。そして、そのときどきの〈思考の存在被拘束性〉とは「人間の思考のイデオロギー性」にほかならず、「ある決まった特定の歴史的・社会的存在位置 Seinslage にとうぜん帰属するものの見方 Aspekt, および、ものの見方に結びついた世界観 Weltanschauung と考えかた Denkweise とをあらわす」概念を、マンハイムはイデオロギー概念と称する。なんらかの思考連関・生の連関において都合のよいように事実が認識されるところにまさしくイデオロギーがあわれ、それどころか「経験可能性のあらかじめ定められていた唯一の方向への固定」ゆえに、経験さえもすでに方向づけられていることが、イデオロギー概念と関連づけて論じられる<sup>8)</sup>。

思考が存在に拘束され、ものの見方が特定の存在位置に帰属するというさい、存在や存在位置が固定的であるとは想定されていないことは、1925年の「知識社会学問題」での叙述と同様である。マンハイムによれば、人々が置かれる一定の存在位置は、つねに〈生成しつつある im Werden〉もの、〈生き生きした流動 der lebendigen Fluß〉である。そして、この〈生き生きした流動〉においてこそ「ものごとが本来の姿で問題として立ちあらわれる」のであり、永続的で普遍的なものと思われがちな理論ですら「生成の函数である」とされる<sup>9)</sup>。

思考や論理は、なんらかの時間と場所とにおいて生成しつつある流動的な存在のなかに根を下ろし、そこでこそ成り立ち、その制約を受けている。マンハイムの考える存在被拘束性とは、このように把握されるべきである。

『イデオロギーとユートピア』において特

<sup>5)</sup> Mannheim, *Das Problem einer Soziologie der Wissens*, S.373.

<sup>6)</sup> Karl Mannheim, *Ideologie und Utopie*, Frankfurt/M., 1985, S.54, 58.

<sup>7)</sup> Mannheim, *Ideologie und Utopie*, SS.71, 73, 118, 149.

<sup>8)</sup> Mannheim, *Ideologie und Utopie*, SS.72, 89, 90, 109.

<sup>9)</sup> Mannheim, *Ideologie und Utopie*, SS.50, 97, 110.

記されるべきは、「思考においてそのときどきの社会的存在位置に結びついている諸要素を探究しなければならない」というように、窮極的には考察を存在位置そのものに向けるのではなく、存在位置につながとめられている思考の要素に向けることをマンハイムがみずからに課していることである。『イデオロギーとユートピア』後半部分では、思考やその要素が存在位置に拘束されている事実そのものが述べられるにとどまらず、一步ふみこんで「これまで私たちが支配されてきた動機が、いまや私たちに支配されるようになる」としてされる<sup>10)</sup>。思考や観念に固有な意義を重んずるのみならず、これらの主観的な意識に属するものが客観的な存在や存在位置にたいして主導的にはたらく構図をマンハイムは描き始めるのである。

### Ⅲ. 「知識社会学」1931年

『社会学事典』(Handwörterbuch der Soziologie)の一項目として執筆された「知識社会学」でマンハイムは、存在よりも意識にかける比重をいっそう大きくする。「知識の存在被拘束性の事実にかんする学説」である知識社会学は、たんなる存在被拘束性の事実の叙述、すなわち「ある特定の環境から特定の見解がつけられるという事実の社会学的叙述をこえて、あらわれでたものを把握する力とその力の限界とを再構成するゆえに、批判でもある」とされる<sup>11)</sup>。1925年の「知識社会学問題」論攷において思考や思考様式 Denkstil として考察されてきたものが、1931年の「知識社会学」においては視座構造 Aspektstruktur として、「社会的に共有され

た思考の枠組み」として論じられる<sup>12)</sup>。「〈視座構造〉とは、人がなんらかのものごとをみる作法、そこで人がとらえるもの、それを人が思考のなかで構成する仕方を、あらわす<sup>13)</sup>」ものであるが、思考のしくみ、思考の枠組みにたいする関心をマンハイムがいっそう強めていったことがここから窺える。

この指向は1936年に上梓された英語版『イデオロギーとユートピア』序文においてさらに前面に押し出され、つぎのような叙述がなされるにいたる。

「かつて私たちの陰にかくれていた無意識の動機が私たちの視界にあらわれ、そうして意識の制禦を受けうようになったときのみ、私たちはみずからの支配者となる<sup>14)</sup>。

「これまで私たちの思考と活動とを動機づけてきた無意識的なものが気づかれる水準 the level of awareness へと徐々に高められ、それとともに制禦されうようになった<sup>15)</sup>。

これは存在に根を下ろしていた意識が存在の拘束を免れはじめ、自立に向かう姿といえるのではないか。

ここにいたりマンハイムの関心は、思考が存在による制約からいかに逃れるか、思考が〈存在被拘束性〉をいかに抜け出すか、に注がれはじめる。

1925年の「知識社会学問題」から1929年の『イデオロギーとユートピア』と1931年の「知識社会学」とをへて1936年の英語版『イデオロギーとユートピア』序文にいたるなかで、存在被拘束性にかんするマンハイムの考察は重点を移してゆく。それは、思考が存在の拘束を受けている事実を明確に認識す

<sup>12)</sup> Mannheim, Das Problem einer Soziologie der Wissens, S.378, 秋元律郎・澤井敦『マンハイム研究』早稲田大学出版部, 1992年, 92頁。

<sup>13)</sup> Mannheim, Wissenssoziologie, S.234.

<sup>14)</sup> Karl Mannheim, *Ideology and Utopia*, Mansfield Centre, 2015, p.43.

<sup>15)</sup> Mannheim, *Ideology and Utopia*, p.5.

<sup>10)</sup> Mannheim, *Ideologie und Utopie*, SS.71, 166.

<sup>11)</sup> Karl Mannheim, Wissenssoziologie, in: Karl Mannheim, *Ideologie und Utopie*, Frankfurt/M., 1985, SS.244, 245.



ることから存在に拘束された思考を救い出すことに、存在被拘束性の厳然たる事実の認識から存在被拘束性を抜け出す道の探求に、マンハイムのねらいが移ってゆくことをあらわしている。一口に存在被拘束性をめぐる論攷といっても、存在被拘束性の事実を知りその仕組みを把握しようとする論攷と、存在被拘束性を逃れ出す方途を探る論攷とは、性格を異にする。マンハイムの一連の存在被拘束性論攷には、このような重点の移動がみとめられる。

ただし存在被拘束性を組上にのぼすさいに、拘束する存在より拘束される思考に関心が寄せられていることは、上記いずれの論攷においても共通している。この点はおそらく終生マンハイムの理論についてまわった傾向であろう。

#### IV. 形而上学へ

唯物論および実存主義とマンハイムの知識社会学との相違をあらためてみてみよう。

唯物論は一般に、人間が自然にはたらきかけて手を加えてきた蓄積とそれによって歴史的に形成されてきた社会的存在とを物質ととらえ、それと人間の意識とのあいだの緊張関係をひとつの主題とする。

「五感の形成は今日までの全世界史の仕事の成果である」<sup>16)</sup>

「音楽がはじめて人間の音楽的感覚をよびおこす……」<sup>17)</sup>

「藝術作品が……藝術的感覚があつて美を感受しうる公衆をつくる」<sup>18)</sup>

これらは藝術作品や世界史という客観的社会的な存在が人間の美的感覚という意識を形

成し陶冶するさま、存在が意識にはたらきかけるさまを描いている。

他方で、世界史が人間のいとなみの蓄積、自然にたいするはたらきかけの蓄積にほかならないところから窺えるように、逆のはたらきかけもおこなわれる。唯物論は巷間いわれるように一切を物質に帰して事足りりとするものではなく、物質にはたらきかけ主体的に客観的世界を意味づける人間のいとなみをも理論に組みこむ。たとえばつぎのような叙述をみるとよい。

「どれほど美しい音楽であっても音楽的な耳にはなんの意味もなく、それは対象にさえならない。……私にとってある対象の意味(対象にふさわしい感覚にとってのみ意味がある)は、私の感覚がおよぶところまでしか広がらない」<sup>19)</sup>。

ここには、主観が客観をとらえるさま、主観が客観に作用をおよぼすさまがあらわれている。唯物論はたんに物質が第一の存在で意識はつねに物質に従属することを主張するものではなく、客観と主観とのあいだ、物質と意識とのあいだに相互作用があることを、みずからの理論構成に組みこんでいるのである。

この理論構成は一見するとマンハイムの知識社会学と類似するかのようである。けれども、物質的存在として意識を制約する客観より、意識的存在として物質に制約される主観にマンハイムが関心を寄せるのと対蹠的に、唯物論において第一義的なものはといえば物質的で客観的な存在、たとえ主観のはたらきが形成に与ったとしてもすでに客観的社会的な性格を帯びている存在である。主観と客観と、思考と存在との緊張関係のなかで、唯物論は客観的社会的な物質的存在に重きを置き、マンハイムの知識社会学は主観的精神的な思考に重きを置く。この相違が看過されてはな

<sup>16)</sup> Karl Marx, *MEW*, Ergänzungsband I, Berlin, 1968, SS.541-542.

<sup>17)</sup> Marx, *MEW*, Ergänzungsband I, S.541.

<sup>18)</sup> Karl Marx, *MEW*, Bd.13, Berlin, 1961, S.624.

<sup>19)</sup> Marx, *MEW*, Ergänzungsband I, S.541.

らない。

マンハイムの知識社会学に類似するようにみえた他方の実存主義についてはどうであろうか。実存主義は、結局のところ乗り越え不可能でいかんともしがたい人間のありかたに意識や意志や自由が決定的に制約されているという厳然たる事実を前に、みずからの限界と非力とのもとで生をいとなむ自覚、いかえれば「人間とは無益な受難である」<sup>20)</sup>ことを宿命として受け入れざるをえず、しかしそれにもかかわらず「かくのごときが人生なりしか、いざ今一度！」<sup>21)</sup>として人生をみずからのもとに取り戻し、みずからの意志によってその宿命をみずから引き受け克服して生きてゆくという自覚である。7年余を欧州で暮らし、現実的存在 Exsistenz を実存と略称した九鬼周造は、実存主義の考えかたについてつぎのように論じた。

「人間存在にあつては存在の仕方がみづからによつて決定されると共に、その決定について自覚されてゐるのである。人間存在は存在そのものを自覺的に支配してゐる。如何に存在するかに対する自覺的決定力を有つてゐる。従つてまた各々の人間存在はその各々の独自の在り方を有つてゐる。人間は現實的存在すなはち実存を本當の意味で自己のものとして創造する。」<sup>22)</sup>

このように実存主義は、人間にあたえられた不可避の宿命から目を背けることなくこれを受けとめ、わがものととらえかえし、みずからの現実的存在をつくりだしてゆくことを指向する。この指向は意外にマンハイムの知識社会学と近いように思われる。マンハイ

ムは、存在や〈Konstellation〉が人間の思いどおりにはならないことをみとめたうえで、それを人間が知り、把握し、諒解することによって、思考が存在を超越する可能性を求めたのであり、この点で実存主義との近似性が指摘されうる。ただ、実存主義が哲学や文学の世界に浸透し、生身の人間の生きかたに迫る思想をくりひろげたのにたいし、マンハイムの知識社会学は、より社会科学的、より論理的な構成を意図するものであったといえる。おそらくマンハイムは実存主義にたいして共感をいだきながらも、実存主義者の叙述をそのまま受け入れることができなかつたのではないだろうか。

「集合的・無意識的動機が意識的になる過程」にふれたマンハイムは、さきにもたように「これまで私たちの思考と活動とを動機づけてきた無意識的なものが気づかれる水準へと徐々に高められ、それとともに制禦されるようになった」ことを事実として呈示する<sup>23)</sup>。ここでいう無意識的なものには、思考を拘束している全体的存在や、全体的存在に拘束された思考のありかたがふくまれるであろう。そこでマンハイムは、ふだん無意識の領域に抛置されている全体的存在や思考の存在被拘束性を見極め自覚することによって、思考が存在被拘束性を逃れ出て存在を克服することを構想したと考えられる。

この構想は思考が自立する可能性を求めることであるが、それはあくまで可能性の追求である。「種々の出発点や事実によってゆく点を、意識的で明確な観察の領域にうまく加えることができた場合にのみ、私たちは無意識の動機や前提を制禦することが期待 hope

<sup>20)</sup> Jean-Paul Sartre, *L'être et le néant*, Paris, 1976, p. 678.

<sup>21)</sup> Friedrich Nietzsche, Also Sprach Zarathustra, *Nietzsche Werke*, Kritische Gesamtausgabe, VI, Berlin, 1968, SS.195, 392.

<sup>22)</sup> 『九鬼周造全集』第9巻、岩波書店、1981年、401頁。

<sup>23)</sup> Mannheim, *Ideology and Utopia*, p.5., Cf.p.43. なお「無意識的なもの」はたとえば日本に古くから浸透している集団同調的マントリテにそくしても論じられうるであろう。拙著『韓国の社会はいかに形成されたか』第17章、日本経済評論社、2019年をもみよ。

できる」<sup>24)</sup>とするすマンハイムは、存在被拘束性の把握によって思考の自立が保証されるのではなく、ただ自立が可能性として呈示されうるにとどまることを自覚していたと思われる。この自立の展望は、倫理的実践的色彩の濃い実存主義より概念的論証性が高いとしばしば思われてきた形而上学に託される。

存在被拘束性を負った人間が意識的人間に高まり、存在を超える道は、社会科学において手に入れることはできない。存在や存在被拘束性の克服が考えられるとすれば、それは形而上学において観念的にころみられる以外にないであろう。意識や思考が人間をとりまく全体的存在に打ち克つ道は、わずかに形而上学に残されるのみである。これが10年以上にわたって存在被拘束性を考察してきたマンハイムの行き著いた地点である。

### 結びにかえて

思考や観念などの人間の意識を知らず知らずのうちに方向づけて枠にはめる全体的存在をマンハイムは考察し、意識が存在のうえに成り立っているさまを見極めようとした。その見極めをふまえてマンハイムは、意識が存在の拘束を逃れ存在を克服する道をさがしもとめた。すなわち存在被拘束性概念によって結局マンハイムは意識の優位を確保しようとした。ただし、意識の優位に展望を開くとし

ても、それは形而上学としてのころみに限られざるをえなかった。

そうであるとすれば存在被拘束性概念による思考の分析は、当初は社会科学的論理による構成が企図されたとしても、やがて形而上学的色彩が濃くなり、重点が移ったり抽象に傾いたりほやけたりする現象を招来するにいたる。マンハイムの存在被拘束性概念の曖昧や不安定はおそらくここに起因するであろう。本稿ではこの十全な論証を果たしえなかったが、さしあたりの見通しをころみみた。

世界の動的なものや流動的なものを重んずるマンハイムの問題意識は、マルクス主義をふくむ社会科学的枠組みにおいても見落とせない意義を有するが、この問題意識を深めてゆくマンハイムの論理は、かならずしも緻密ではなかった。その一因は、人間をとりまく広汎な〈Konstellation〉がもともと把握困難なものであることにくわえ、動的なものや流動性に重きを置きつつ〈Konstellation〉全体を包括的に把握しようとするマンハイムの姿勢、しかもやがて形而上学の領域に入ってそれらを根拠づけようとした姿勢に、みいだされるであろう。思うに、動的なものや流動性に重きを置くことは、静的で固定的な理論的思考とは異なる経験を必然とし、この経験が、観念的形而上学的領域を措いて求められなかったのではないだろうか。ここにマンハイムの隘路があると考えられる<sup>25)</sup>。

<sup>24)</sup> Mannheim, *Ideology and Utopia*, p.5.

<sup>25)</sup> この小稿ではかつて小坂直人教授が研究拠点となさったマンハイム大学にちなんで同名の社会理論家を取りあげ、その叙述におけるある種の不徹底を粗描したが、そこにみられる問題意識や理論枠組み構成の企図は今日なお私たちが顧みるに値すると思われる。



